

第2回箕輪町森林ビジョン検討委員会 議事録

日 時： 令和5年10月24日(火) 14:30～16:30

場 所： 箕輪町地域交流センター 研修室 A・B

出席者：別紙のとおり(次第・出席者名簿参照)

1 開会 (みどりの戦略課 課長 山口弘司)

- ・第2回委員会にご出席ありがとうございます。現地視察、ヒアリングへのご協力にも感謝する。
- ・みどりの戦略課は、森や山に関係する団体と共に、境界確認や山作業を行ってきた。10月14日には、箕輪ダムにおいて「みんなで育てるみのわの森づくり」のイベントで植樹祭を行って大変盛況であった。その中で参加者からのコメントとして、「山登りは大変きつい」「もっと森に手を入れなければいけない」といったものが聞かれた。また、親子からは「楽しかった、またやりたい」といった感想も聞かれた。まさにビジョンで目指すところだ。
- ・今日も活発なご意見をいただきたい。よろしくお願ひしたい。

2 議事 (進行:三木委員長)

(1) 委員関係イベント・事業報告

①「森と人」(太田委員、相澤委員)【資料1】

- ・9月30日(土)にながた自然公園で開催されたイベント「森と人」について、別添資料に基づき、説明
- ・同イベントに出展者として参加した小平委員、協力者として参加した岡田委員から一言ずつコメントをいただいた。

小平委員：自宅の庭で育てたダンコウバイ等の苗木を販売したが、1つしか売れなかったのは残念だった。人出は多くはなかったが少なくもなかった。ちょうどよい空間ができていたと思う。ネイチャーガイドが森を案内してくれるという出展があったが、もう少しガイドの人数を増やして、参加者が森に入る機会を増やしても良かったのかなと思う。

岡田委員：敷居の低い、参加しやすいイベントだったのでと思う。色々な方が出展していたので、森への色々な関わり方の事例を目にすることができたのは、森ビジョンの中でも、「どうやって木や森に関わるのか」という出口

戦略のようなどころを取り上げていく上で、そのきっかけになるようなイベントだと感じた。

②「みんなで育てるみのわの森」（みどりの戦略課 小笠原係長）【資料2】

- ・10月14日に箕輪ダムのイベント広場で開催されたイベント「みんなで育てるみのわの森」について、別添資料に基づき、説明。

③「箕輪町森林ビジョン検討委員会 現地視察」（(同)ラーチアンドパイン 杉本）
【資料3】

- ・9月19日に開催した現地視察について、別添資料に基づき、説明。

(1)-2 質疑応答、コメント

委員長：参加者の中の子どもが占める割合はどれくらいだったか？

太田委員：親子で参加してくれる人が多かった。ただ、「大人も楽しめる」を目指したワークショップ等を行ったので、大人だけの参加者も多かった。子連れでなくても楽しめるイベントにすることで、箕輪町の既存のイベントとの差別化を図った。

三浦委員：人を集めるといって、(地域の)色々な団体や行政の協力を得て、その役員などを集めてくるというイメージが強い。だが、先ほどの説明を聞くと、町外の人も参加しており、どうやら今回のイベントは違いそうだ。どのように広報したのか、来場者は何を見て参加したのか、どういう層の人が来てくれたのか？

相澤委員：町外からの来場者が多かったというところでは、出展者にも町外の出展者がいたので、その方々が各地域のお客様を呼んでくれたというのがある。広報は自分たちだけで、SNS(インスタグラム)を利用したのと、チラシを1,000枚配った。今回は、従来の町のイベントとの差別化という意味でも、比較的高価格帯の出展者(飲食等)を呼び、少しお洒落なイベントを目指した。従来の(動員的な)人集めで、「地域のために」「子どものために」参加するお客様からすると、「少し高い」という印象になるかもしれないと思い、人集めの方法から変えてみた。

三浦委員：チラシ1,000枚はどのように配布したのか？行政や区の力を借りてバースト撒くということはしなかったのか？

太田委員：自分たちで配布したのと、興味のある人が集まりそうなお店に置いてもらった。また、諏訪や木曾なども含め、自身の地域おこし協力隊としての繋がりなどを活かして、広く配布した。（ながた自然公園のある）沢区では回覧もしてもらった。

三浦委員：来場者は地域のしがらみや動員的ではなく、楽しそうだね、ということで来てくれたということか。

相澤委員：ボーナス的なところでは、ちょうど赤ソバを見に来た団体観光客が立ち寄ってくれたというのもあった。

三浦委員：きっかけはどうしても、「あ、いいな」で来てもらえるというのは良いことだ。

岡田委員：現地視察に関して。沢の水の流れをいかにスムーズに逃がすかが防災の中では難しいと思うのだが、森林に起因する災害をどう防ぐかということについては、現地から戻ってからの議論では出てきたか？

事務局：現地から役場に戻ってからの議論では、大きなコンクリート施設を入れるような防災の話ではなく、「地域でできる安全確保とは何だろうか」というところをメインに話した。今回視察した下古田の上の山沢などでは、地域の方が沢の中の倒木をどけたという実績もあるので、そういったことを他の地域でもできるところから始めましょう、という話になった。

委員長：現地視察の議事録にも書いてあるが、今回視察した「猿が沢分岐」は、森林ゾーニング支援ツール「もりぞん」では「林業適地」となっている。しかし実際は大雨が短期的に降ると木が倒れる場所だった。「もりぞん」は万能のツールではなく、現場をよく知る人たちが現地をよく見た上で、「もりぞん」の分類を参考にして、計画を立てていく必要がある、という話をした。また、この辺りは水道施設があり、それに付随して小さい橋がかかっている。その橋が倒木に覆われてしまうと、いくら周囲が林業適地でも、木材生産ができなくなってしまう。林業をやっていくのなら、そうした施設の管理もやっていかないといけない、という話になった。こうしたことは、実際に皆で現地を確認してわかったことで、現地視察をしてよかったと思う。

(2) 経過報告（(同)ラーチアンドパイン 杉本）【資料4】

(3) 第1回委員会・ヒアリングを踏まえた検討事項について（同上）【資料4】

・別添資料に基づき説明

(2)(3)-2 質疑応答、コメント

岡田委員：4枚目のスライドで、「災害リスク」を取り除くとあるが、「災害」とは、何を指すと考えているか。

事務局：「災害」なので、直接的に町民の生命財産を脅かすものを指すと考えている。具体的に挙げるなら、先ほどの上の山沢で見たように、沢に倒木がつくねられているような状態、土砂災害が起こりそうな状態、などが「災害リスク」だと考えている。前回委員会での質問の中で岡田委員が災害として挙げられた「倒木」については、直接的に家に倒れ込むとか、沢に倒れ込んで土石流になるかもしれない倒木は「災害リスク」だと考えるが、例えば尾根筋で発生する（土石流にならない）倒木は災害ではなく「現象」と考えている。もちろん、そうした倒木も「災害リスク」と捉えて除去できれば望ましいが、費用やマンパワーから優先順位を考えると、その順位は低くなると考えている。

岡田委員：災害というと、どうしても土砂災害をイメージしがちだが、白鳥委員が富田区長をされていたとき、台風による大規模な倒木が発生して大変なご苦労をされた。そうしたことを考えると、風にも強い森をつくることが大事だと思う。

三浦委員：「もりぞん」は広い地域で大まかに評価しているもので、ピンポイントの現地の情報を加味していけば全く違う評価になってくるかもしれないということだが、今後、そのピンポイント情報をどう蓄積していくか、どう調査していくのか、のビジョン（アクションプラン）も、この委員会の中で議題にするということによいか。大変な仕事だとは思いますが。

事務局：今後は地区単位で説明会や意向調査を行って、そこで細かく地区ごとに見ていくことを考えている。一度に15区は難しいので、年に数地区ずつ進めていければと考えている。

三浦委員：時間のかかる話だとは思いますが、正確なものをつくった方がよいので、時間をかけてやっていくべきだと思っている。

事務局：ビジョン本編案のアクションプランで、町がすぐにでもやることとして「森の基礎情報の作成と森林所有者への提供」と書いてある。これが、地区ごとのピンポイントの情報の精査を指す。

三浦委員：行政は、時間のかかることは苦手。人事異動などもある。ビジョンの中に「10年くらい時間がかかっても、正確なデータを蓄積するのだ」ということを書き込まないと不安。せっかく良いビジョンができて、本当にできるのかということ。役場の職員が代わったらはしごを外されるということのないようにしたい。

保科アド：見守る管理の中で、「災害リスクを取り除く」という言葉が出てくるが、それで大丈夫だろうか、と思う。森林の管理の中で災害リスクを完全に除去することは難しいが、この言葉だと全てを取り除くように伝わりかねないかなと思う。語弊が生じないように、例えばひとつ上に「保続管理」という言葉も出ていたので、その辺りの言葉を付け加えて少し柔らかい表現にした方が良くかもしれない。この辺りは解釈の差が生まれやすいと思うので、知恵を絞って、言葉を考えた方が良いと思う。

委員長：なるほど。ただ、取り除ける災害リスクもある。明らかに傾いている木は伐れるし、沢に倒れ込んだ木はどけられる。例えば、「災害リスクを取り除く・軽減する」とか。

保科アド：あくまでビジョンの中では、森の管理の中でどこまでできるか、という話。コンクリート壁を造ろうという話ならまた変わってくるが、どうやって森を活かしていくかという観点での話だと思うので、もしかすると「災害リスクを取り除く」というこの言葉は、独り歩きすると解釈に温度差が出るなど思った。

岡田委員：独り歩きしてしまうというところでは、林業適地が16%という評価。これはよほど丁寧に示していかないと、これが独り歩きしてしまうのではというところを心配する。例えば議会で（ビジョン策定の）進捗状況を聞かれて、執行部側が「使える山は16%」と答えただけで、それが独り歩きしてしまう可能性がある。メディアでもそう。15地区を回るときにも、丁寧に説明しないとイケないと思う。

事務局：今後、この数字は出さない方が良くも思っている。前回の委員会でこの数字を示したのは、箕輪町の森林の課題を整理する上で、木材生産の位置づけを（林業で成り立つ町ではないこと）を共有するためだった。先ほどのスライドでも説明した通り、現段階で精査されていないこの数字自体にはあまり意味がない。大まかなイメージを掴むためのものだったので、議会等で独り歩きされるのは困る。

委員長：表現の仕方には気を付けないといけないと思う。この評価は、「現時点で」

という話。今すぐお金にできる森は16%くらい、ということ。新たに道を通す等すれば、木材生産適地は増えてくる。山の傾斜や土質は如何ともし難いので災害リスクは変わらないが、そこで木材が生産できるかできないかについては、変えることができる。ただ、そうした説明を万人にすることはできないので、表現の工夫は必要。今後、どのように記載するか等は検討していきたいところ。

保科アド：現在の「もりぞん」による評価には、正確な道の情報が入っていないとスライドに書いてあるが、長野県では今、道の情報をGISに落とし込めるように数値整理することを進めている。そうしたことが進んでくれば精度が上がる。今はあくまで「傾向」として見てもらえれば良いと思う。また、委員長もおっしゃった「今後、道を開ける場合」のターゲットというのは、「もりぞん」の評価から見ることができると思う。

委員長：貯金と同じで、今ある分を全て使ってしまう人はいない。今回「もりぞん」で示された16%というのは、貯金のうちの「今使える分は16%」ということと似ている。何かうまい表現で、その辺りを示していければ。

(4) 森林ビジョン本編修正案【資料4】

・別添資料に基づき説明

(4)-2 質疑応答、コメント

中村委員：区としては財産区を区民から預かっており、これまではお金にするために作業をしてきた。松島区ではR3年からは作業ではなく、区民から管理費をもらっている。木が成長したので下草刈りをしなくてよくなったからだ。昨年冬に、町の森の収益性というのはあまりないということがわかり、「山野の方に人やお金を掛けても仕方ない」という話になってきた。今は曲がり角にきている。「収益性がない」ということのお墨付き、根拠が欲しい。今までは区民に「収益性がある」と説明してきたので、それが変わってしまうことで、説明することが恐ろしい。管理費を今後何に使うのかということも、方向転換を大きくしなければいけないので、それを区民に説明するためのアイテムが欲しい。16%という数字も、納得してもらうためのひとつの根拠だ。「もりぞん」のもっと正確なデータ、道や水源も考慮した正確なデータを基に、判断をしてもらえるとありがたい。

委員長：なるほど。恐らく事務局も説明すると思うが、今収益性が低い森林というのは、「道がないから」そういう評価になっている。これからそこに道を通して

いくかどうかは、「もりぞん」は考えてくれない。それは、所有者や町が考えることになってくる。

中村委員：この森に今後もお金や労力をかけていくべきなのか、どこかで判断しないといけない。次の区長さんに回してもよいが、誰かが判断しなければならないので。

保科アド：そういう話になると、恐らく、各所有者さんの価値観に対してどう判断していくかということ。ビジョンの中で白黒つける話ではなくて、個々の経営判断の話。県の林務課の普及担当に個別対応の中で相談してほしい。

委員長：「もりぞん」ではっきり言えることは、災害リスクが高いオレンジや紫になっているところは、これ以上手をつけないということ。

保科アド：木材生産以外の森の使い方など、色々な提案の「もと」になるものだと思う。

事務局：中村委員は、松島区の森全体について判断しようと考えていらっしゃるかもしれない。実際には、森は一樣ではないので、区の森のどこをどう管理していくか、ということ判断していくことになる。これまでの説明の中で、それらを「所有者の意思で判断する」と話してきたので、負担に感じてしまったのではと推測する。実際、最終的な意思決定をするのは所有者だが、その意思決定をするために必要なデータ・情報の提供やサポートは、県の普及担当や我々を始めとする専門家が行う。なので、区長が全て背負わなければいけないと負担に感じることなく、一緒に考えてもらいたい。

中村委員：区の運営全体の中でやっているのだから、判断ができればと思っている。それから、「危険な箇所」についても、前回も優先順位の話もしたが、区でできることは限られているので、町で一括管理することを考えてもらいたいと思う。区界などでは誰が危険を見ていくのか、という話になる。その辺りを一括で見ていただくことは必要だと思う。

委員長：もちろん、本当に危険なところは保安林に指定して県に治山工事をしてもらうこともあり得る。そういう場所がどこなのか、といったことについて全体を見ていくことは確かに必要だ。

委員長：他の修正点等についてご意見は？

保科アド：管理メニューのところについて。「財源」が書いてあるが、ここでは細かく書く必要はないかなと思う。逆に言うと、必ず使えるとも限らないので。むしろ、管理メニューごとに目標林型（目標とする森林の姿）の事例などが入っているとわかりやすいのでは。最終的にこういうような森を目指すという

ことがわかる「事例」を示すのが良いのでは。

委員長 : 言葉もそうだが、写真などがあっても良いかもしれない。

委員長 : 他には？

相澤委員 : 4分類に修正してもらった森の評価の分類だが、第1象限(右上)は、災害リスクが高いのにレク林というのも、すぐにはピンとこない。「保全対象から近いから災害リスクは高いけれど、道から近いからレク林」というのは、説明を聞けば理解できた。初めて聞いても理解できるような文言、例えば縦軸(収益性の軸)に、「アクセスの良さ」のような説明を加えれば少し良いだろうか。

委員長 : 他にはあるだろうか。私としては、「森林との関わりしろ」の中に、「山から出てきたものを利用する」ような関わりしろも加えると面白いのではと思う。すべての町民が森に直接入りたいとは限らないので、もっと色々な関わり方をいれても良いのでは。

中村委員 : アカマツの炭を入れたパンを焼いて売っていたりする。委員だけではなく、様々な取組みについて書き込んでいければよいのでは。

根橋委員 : 関わりしろについて。沢区の展望台、萱野高原の再開発など、これから観光とも絡めて位置付ければ、大きな可能性を秘めているのではと思う。

委員長 : アクションプランに書き加えられた「町の森の見どころや管理の先進事例等の見える化」について、これをぜひビジョンにも、事例を具体的に書き込んでいきたい。ビジョンに「見える化する」とだけ書くと、実際に見える化はその先になってしまうので、ビジョン自体に書き込みたい。会議の場ではなかなか出てこないかもしれないが、情報収集の機会を作ればと思う。

中村委員 : 山だけでなく、ながた温泉や萱野高原にもつながって活性化して、そのひとつとして山も良くなる、というかたちが良いと思う。

委員長 : たしかに。先ほどの「森と人」のイベント報告でも、赤ソバを見に来た人が森のイベントに立ち寄った、という話があった。そうやって一体的に、全体を考えていけたらよいと思う。

太田委員 : 「もりぞん」の「森の性質を見極める」から「意思決定」へと考えていく流れが書かれているが、木材生産以外の利用、通いたくなる森づくりについて考えるには、色々な先行事例を知っておく必要がある。事例が浮かばない中で「決めて」と言われても困ってしまい、「何もしない」を選択しがちになる

のではと思う。

事務局 : たしかに。「関わりしろ」をビジョンの中で挙げておく意味は、ここに見出せるのだということに、太田委員のコメントで気付かせていただいた。

小平委員 : 関わりしろというと、そのアイデアを出す人たちが、どれだけ山に入った経験があるか、ということが大事だと思う。「森の楽しみ」をそれぞれの人が知らない、なかなかアイデアが出てこないかもしれない。香りや実りなど、具体的に我々が知っていることが大事。町内には、サイカチやツノハシバミもある。「これが楽しいよ！」と我々が言えないと、なかなか人が振り向かないかも。そう考えると、「森と人」のイベントのように、身近な森に入る機会を提供して、歩きながら「あの木が倒れたらどうなる？」災害の話もできるようなことができれば良いと思う。

三浦委員 : 小平さん、福与の山にも来て、香りの話などをしてください。今、小平さんがおっしゃった木は全然わからない。ぜひそういう機会をつくってほしい。

釜屋委員 : 関わりしろというところで、「森林と観光」というのは箕輪町の魅力発信のツールになる。「森の案内人」がいたら、学校などでも活用できる。個人では難しくても、行政にも関わってもらえたらと思う。町内で宿泊して、作業や体験ができて、2～3日いて帰る。そこに、案内してくれる人がいるというのは、これからの観光において良いツールだと思う。

委員長 : 今日これまでご発言のない方々はどうか？

白鳥委員 : 林業適地 16%。私にはこの数字は信じられない。もっと、60～70%はいくのでは。今、カラマツが植わっているところは、かつては伐って搬出した。まして技術は進んでいるから、技術的に出せないことはない。今は金にならない、という問題。大きい面積持っていればよいが、小さな面積の山ではまず無理。それから、伐った後をどうするか。伐った後に森を育てなければ災害になる。そういうことを全体に見ていかないと、ビジョンにならない。森に関心を持たせるというところで行くと、穂高に国が経営する公園があるが、親子連れなどが多く集まっている。さすが国の施設だなと思う。こういうことができれば、森に関心が出てくるのかなと思う。

小田切委員 : 中村委員から、木材の収益性を考えると厳しいという言葉があったが、森というのは木材生産と公益性という両面があるから、捉え方が難しいなと思う。収益という目で見れば、そういう意見もごもっともと思うが、区民の皆さんが山に足を運んで山の手入れをしていることで、地域の安全を守っていると考えれば決して無駄ではない。そういう力が箕輪町を支えている。苦勞

はされているのだけれど、それは無駄ではないということをビジョンに書けば、自分たちも貢献しているのだと思えるのではないか。何かそういう感じることが一つあれば、もうちょっと頑張ろうかなと思える。ビジョンがそういうきっかけになれば良いと思う。

田中委員：私は福与在住。関わりしろとして、萱野高原のことが書いてあるが、福与・三日町では、民間が主催して、年に一回、萱野高原にハイキングに行っている。私個人としても、何年か前まで50～60年、萱野高原で初日の出を見ようという会をやっていた。コロナで解散してしまった。萱野高原には何年か前まで萱野山荘というのがあった。今となっては取り壊す話にもなっているが、こういう観光地の建物を無くしてしまうのはいかがなものか、と思う。山が好きな人は、寒くなってからも萱野高原でキャンプをしたり、けっこう利用されている。建物がなくなったとしても、なんとかPRをして、多くの人に来てもらいたい。上へ登ると景色もとても良い。多くの人に来てくれたら良いと思う。

小口委員：中村委員の話が先ほどあったが、沢区も同じ状況。年に数回、山作業はしているが、こういう（ビジョン検討委員会のような）勉強会というのはいない。ただ役員が山へ行って、言われた作業をやっているだけ。こういう勉強会に出てみると、私自身、山の見方が変わってきた。もっとこうしたら良いかなというアイデアも湧いてくる。言われたことをただやってただけだと、山に対する愛着も湧かないのではと思う。このビジョンが出来たあと、誰にどうやって周知していくかによって、山の管理が変わってくるのではと思う。沢区も、補助金と区民から集める管理費を使って山の管理をしているが、3年ごとに計画を立てなければいけない。補助金も段々少なくなる中で、「次の3年の山作業をするか」という判断をしなければならない時が来るが、こういうことを知っていれば、判断が変わってくると思う。先ほど事務局が、10年くらいかかるかもしれないが年に3、4区ずつ勉強会などをしていたが、ぜひそれをやってほしい。できれば区長などに対してやってほしいと要望したい。それができれば、山の見方が変わってくる。

委員長：今必要な山作業は何か？というアドバイスは必要。そういうことを、県などから地区ごとにもらえると良いのではと思う。

委員長：残り時間がわずかになってきた。関わりしろの部分、或いは町内の好事例等、ビジョンに載せた方が良いのではというものを、事務局に伝えてほしい。

事務局：今回も委員ヒアリングを行う。

委員長 :ではヒアリングで事務局にお考えを伝えてほしい。では議事の進行を事務局に戻す。

事務局 :活発な議論をありがとうございました。本日、町長が来ているので、一言いただく。

(5) 町長挨拶 (町長 白鳥 政徳)

皆様ご苦勞様でございます。審議中なので私が余分なことを言うのは避けるが、私としてはもともと産業施策の中で森林ビジョンを考えていた。農業も製造業も観光も、それぞれ産業施策をどう動かしていくか、町の独自性をどう出していくかという中で森林ビジョンの話も出てきたのだが、議論をいただく中では、生産性、地域の生活というだけではなく、森林のそれ以外の価値、防災などに非常にクローズアップされているというのがわかる。これは皆様のご意見をいただきながらまとめていきたいので、お願い申し上げます。これは、町に合った施策にしたいと考えているが、一番は、管理されない個人林、管理されない財産区有林を将来的にどうするかということも議論の俎上に載せてもらいたいということを事務局には伝えている。地域の中でできないことを行政がやるといっても難しいことなのだが、その方向性を出していく部分がどのくらいあるのか、そんなことは考えていきたいと思っている。それぞれの分野で活躍されている皆様のお話を、非常に興味を持って聞かせていただいた。まだ2、3回、委員会はあるので、引き続きよろしくお願ひしたい。

(6) その他、連絡事項

- ・明日10月25日は、アドバイザーを務めていただいている石川県立大学の丸先生による森林防災の学習会を予定している。ご都合がつく方は、ぜひご参加を。
- ・第1回委員会後と同様、委員ヒアリングを予定している。今日の議論の中でも出てきたが、関わりしらのアイデア等を特に伺いたいと考えている。都合がつかない場合、前回十分に話したという場合等は、ご連絡をいただければ、今回のヒアリングは行わない。それ以外は日程調整をさせていただければと思う。